

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | スナップ |
| Author(s) | 児童の言語生態研究会, |
| Citation | 児童の言語生態研究 , 11 : 69 - 71 |
| Issue Date | 1982-12-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045128 |
| Right | |
| Relation | |



○ちよ(四才)・ふかし(六才)・かよ(小二)
ふかし「もー、ちよなんかと絶交だもんね」
ちよ「イーダノ」

S 「絶交って何？」
ふかし「知らんぷりすることだよ」
(S・54・4・20)

○みんなで、夕食を食べている。二年生の女の子が、あそびあそびでなかなか食べない。
S 「だめじゃあ、ないですか。かよさん食べなくっちゃって、いつも、せっちゃん、学校で、言っているんだよ」

ふかし「いばってる。いけないんだよ。女はいばっちゃ」
S 「どうして、いばっちゃいけないの？」

ふかし「男が、いばるの」(S・54・5月)

○階段のところで、遊んでいる。

かよ「そんなところで、とんだり、急いだりしたら、オダブツよ」

ふかし「えっ？オダブツ？オダブツじゃないよ。しりもちって、いうんだよ」

かよ「だから、そういうの、オダブツっていうのよ」

ふかし「しりもちだよ。だって、デ、デ、デーデンデンって、おっこちるんだろう」
(S・54・6・24)

○「トラのパンツはシマシマパンツ、はいても、はいても、またぬげるー、みんなも、わたしも：」
ふかし「へっ、わたしもって、カヨちゃんも

そうなの」
かよ「ちがうけど、わたしじゃなくても、わたしじゃない、わたしのことをいうの」
(S・54・6・24)

○ちよ(五才)・ふかし(小二)・かよ(小三)
かよ「ふーちゃん、それ、いいの？おにいさんとして」

ふかし「ああ、おにいさんとして、いいんだ」
ちよ「そうだよ。チヨも妹として」
(S・56・1・3)

○ちよ(六才)・ふかし(小二)・かよ(小四)
ふかし「節ちゃん、ぼくんち、来たっけ」
ちよ「きたよ」

ふかし「ああーそういうえね。節ちゃんのおじさんと一緒に来たっけね」

かよ「節ちゃんのおじさんじゃないんだよ。だんなさんなんだよ」

ふかし「ちがうね。節ちゃんのおじさんだね」
かよ「おじさんじゃないの、わかんないんだなあ、ふーちゃんて」

ふかし「だってよ。オトコの人で、おじさんじゃないか」
(S・56・4・26)

○近くの公園に遊びに行く。親せきの子が帰るから、一度、家に帰りましょう、というとうふかし「一とおね。でも、いちおおって、いつも、いちおおじゃなくなっちゃうんだよね」
と、ぶつぶつ。
(S・56・8・5)

○いとこたちを連れて、公園に行く。ふかしが、先頭にたって歩く。
ふかし「さ、ならんで、ならんで、ダメ、ちゃん」と一列だよ」
ちよ「あ、ふーちゃんは、出ているじゃん。列から：」

ふかし「ぼくは、いいの、ちよって、いやだな。ぼくはね。みんなをならばせているんだからね。たいへんでね。一列つになれないの」(S・56・8・15)

○おさいふのおみやげをおばあちゃんにもらって、大ニコニコ。おばあちゃんが、「ご縁があるように」と言って五円ずつ、さいふに入れてあげると、
かよ「おばあちゃん、ごえんってなあに？」
かよ「そうねエ：へ：とわらうと」

かよ「そうか、いいことなんだ。大人のいいことかな？」(S・56・12・6)

○得意そうに、なめねこのカードを見せる。運転免許証のようになっていて、それには「死ぬまで有効」とかいてある。
ふかし「これ、死ぬまで、行こうなんだよ」
(S・56・12・6)

○折よく、友人が、いちごをもってきてくれた。我が家には、兄夫婦と子どもたちが来ていて、大にぎわい。いちごを出すと、
かよ「ねえ、下鳥さんて、いいものをもってきてくれたね」
ふかし「そうだね。こういうの気がきいてる

スナップ

っていうんだね」(S・57・3・22)

○ちよ「節ちゃん、前は、こんなにスマートだったのに、よくふとったねえ」

かよ「ふとったんじゃないよね。赤ちゃんが、いるんだよね」

ちよ「だって、おばあちゃんと同じになったよ」(おばあちゃんもふとっている)

かよ「ぜんぜん、ちがうでしょ」

ふかし「こうやってね。じゃって、きって、

(おなかを切るまねをする) ポンて、

赤ちゃんが、とび出すとね。もとにもどるんだよね」

ちよ「でも、ずいぶん、ふとっちゃってねえ： 節ちゃん、赤ちゃんっていったって：」

(S・57・3・22)

○ハワイへ旅行に行って、ハナウマ海岸で、母親が日本人、父親が米国人の子どもに会った。顔は、父親ゆずりの顔で、どう見ても、米国人に見えるが、ことばは、全く日本の子どもと変わらない。二人で、砂山をつくりながら遊んでいると、ふんふんと楽しそうに鼻歌をうたっている。

S「ねえ、何、うたっているの？」

C「ぼくね、なんとなく、うたったの。」

S「なんとなく、何って曲？」

C「ぼくのうたはね、気分なの。」

○あんまり日本語が上手なので、

S「ずいぶん、日本語上手ね」

C「ぼく、英語もしゃべれるよ」

S「ちょっと、しゃべってみて」

話してくれた英語は、日本語まじりである。S「日本語も入っているじゃない？」

C「みんな英語だよこれ」

とすましている。確かにイントネーションは、英語そのものであった。

— 四才男子 (S・56・4・2) —

○旅先で、知り合った、ほりあつしくん。

S「あっちゃん、五才なら、もうすぐ六才で、それから学校ね」

あつし「うん、ぼく、学校きらいだよ」

S「どうして？」

あつし「だって、勉強しなくちゃいけないしそれやだもん」

母親「この子は、絵をかいいたりするのが得意なんですよ」

S「絵だってかくよ。学校って」

あつし「やなの絵だって、学校にいくと、勉強になっちゃうから」

○黄色のかわいい手袋をしている。手のひらのところがこげて、白くとけています。

S「あら、いい手袋ね」

「うん」と、手をひらひらさせている。白くなったのを、母親が見て。

母親「あら、どうしたのそこ？」

あつし「ちょっと、ね。ストーブのところでこうしていたらね」

母親「あら、まあ、いやだ、あっちゃん。知らなかったわー。きのう、おろしたばかりなのに」

ふんと、窓の外をながめ、小さい声で、

あつし「だから、ぼく、ちょっと、いやだったのに、おばちゃん、おせっかいだよ」

— 五才男子 (S・55・12・28) —

○M「うちのママがね」

C「ママだつてよ」

M「ママって、いっちゃいけないの。」

「べつに」

C「でもな：ママだつてよ、おまえ、なんていう」

S「おかあさん」

C「おまえは？」

K「もち、おかあさん」

C「おまえは？」

I「えっとね。ママとパパ」

M「わたしはね。オヤジっていうよ」

一斉に「えっ／＼オヤジ」

M「そう、だって、おねえちゃんなんか、いってるから、いつのまにか、身についてきちゃったのよ」

— 三年生男女 (S・56・10月) —

○けんかのおきにつかうことばを書いてもらった。

「まっぴら、書いてやったぜ」

と、原稿用紙をはずに構えて出す。

— 三年生男子 (S・56・4月) —

○犬をからかっている子がいる。

T「そんな、犬をかまっちゃ、ダメじゃない」

C「かまっていよ。かわいがっているんだよ。かわいがってやろうじゃねえかの、か

スナップ

わいがるだよ」

— 三年生男子 (S・56・4月) —

○おかあさんの絵を子どもに書いてもらった。

N「先生、かけた」

T「あら、すてきね。じゃ、洋服かいて、色

もぬってね」

N「えっ、ぬれねえよ。じゃ、先生、男色の服にするよ。おかあさんには、悪いけど」

— 三年生男子 (S・56・4・22) —

○A「先生、さっき肉マンの話したでしよ」

T「うん」

A「この間、おとうさんが、夜、買ってきてくれたの。それで、食べたらね」

T「おいしかったでしよ」

A「おいしかったけど、ちょっと、大人の味がしたよ」

— 三年生女子 (S・56・4・25) —

○S「私たち、二年生のとき、理科の時間に、先生、ジュースのんだよ」

T「そう」

A「さいわい、わたしは、その時、ダイコンだったから、だめだったの」

— 三年生女子 (S・56・7・7) —

○学級会のとき

M「今、意見を出さないで、あとで、後悔しても、しらないわよ」

H「こわい」

T「こうかいって、何？」

M「バカ、知るわけないじゃん」

C「わかってないのに」

M「わかってる人だっているんだから、わかってよ、かんじで」

○学級会が、大変うるさい。

M「せいしゆくに、せいしゆくに」

H「せいしゆくに、どういういみ？」

M「せいしゆくにするいみよ」

— 三年生男女 (S・56・9・2) —

○徒競走のあとで

C1「ね、大ちゃん、久保ちゃんより、速かったんだよ」

C2「おかしいな」

C1「だけど、でもさ、久保ちゃんが、無神経に走っていたとも、考えられるしな」

C2「大ちゃんより、途中、急に、おそくなるとも考えられる」

T「そうね」

C2「まあな、いずれにしてもだ。大ちゃんが速かったんだよ」

— 三年生男子 (S・56・10月中旬) —

○H「おまえ、何年？」

C1「ねずみ」

H「フーン、ねずみ」

H「おまえは？」

C2「いのしし」

H「おまえ」

C3「わたしも、いのしし」

C4「オレ、ねずみ」

H「だろ、みんなわかってるのに。先生の

年だけ、行方不明だなあ……」

— 三年生男子 (S・56・10月) —

○I「うちのおねえちゃんね。昼間ねて、夜勉強するの。そういうたちの」

T「たち？」

I「たちって、ね。そんな、くせってことかな」

— 三年生女子 (S・56・10月末) —

○教材に、「大造じいさんとガン」「源じいさんの竹とんぼ」と、続いた。

やない「おっ、またしても、じいさん。じい

さんシリーズパートII」

— 五年生男子 (S・54・秋) —

以下二つは相模原・大野北小・堀江教諭報告
○とっ組合いのけんかが始まった。そこへ登校してきたN君、少々あきれ顔で

N「朝ばらから、まあ、さっそうと、けんかしてるよ」

早速の言い誤まりなのか、なるほど、派手

なけんかではあった。

— 二年生男子 (S・56・9月) —

○授業中にとりあげたキューブを、帰りの時本人に返すとき。

T「これから、絶対もってこないって、約束してね」

C1「うん、絶対もってこない。命にかかわる」

C2「命にかけるって言うの」

— 二年生男子 (S・56・10月) —